立命館大学経営学部校友会

ACROSS　速報版

2018 年 8 月 3 日　第 89 号

京都産業の概観
～京都銀行の概要と地場産業の特徴～

2018 年 6 月 9 日、立命館大学大阪いばらきキャンパス・カンファレンスホールにおいて 2018 年度経営学部校友会総会を開催、その後、記念講演会を実施しました。

講師には、株式会社京都銀行代表取締役会長の髙﨑秀夫氏をお迎えし、「京都産業の概観～京都銀行の概要と地場産業の特徴」と題し、お話いただきました。髙﨑秀夫氏は、講演会後の懇親会にもご参加くださいました。

【　講師　**髙﨑秀夫氏**　】

◆ご経歴

1967 年に立命館大学法学部をご卒業後、株式会社京都銀行にご入行され、常務取締役・代表取締役専務を経て、代表取締役頭取にご就任されました。2015 年 6 月には代表取締役会長にご就任、現在に至ります。また、2017 年 7 月から学校法人立命館の理事もお務めいただいています。

◆ご講演の概要

Ⅰ．我が国　金融機関の概要

近代銀行の誕生とその変遷

近代銀行の誕生には、京都の金融資本が大きく関わっています。第一国立銀行や三井銀行の設立には京都の豪商が大きな役割を果たしました。第百三十銀行が大阪高麗橋に設立されましたが、これは宮津や福知山の豪商によって設立されたものです。しかしながら、東京遷都により、京都での地元有力銀行の設立は遅れました。京都商工銀行（当時：東洞院六角下るに所在）は、京都財界の有力者による設立ですが、大正 5 年に第一銀行に合併されました。

かつては銀行が乱立し、ピーク時には 2,300 行を超えましたが、明治 34 年の金融恐慌を機に銀行合併の流れができ、銀行数が減少、その後、金融統制が行われ、第二次世界大戦後には 65 行になりますが、その最後の仕上げのなかで、昭和 16 年に“丹和銀行”が生まれました。

両丹銀行・宮津銀行・丹後商工銀行・丹後産業銀行の 4 行合併により本店を福知山に置いた“丹和銀行”、それが京都銀行の前身です。

金融機関の種類

金融機関の種類は、中央銀行・民間銀行・政府系金融機関に分類されており、民間銀行のなかに普通銀行・信託銀行・協同組織金融機関・農林漁業金融機関などがあります。そして、普通銀行は都市銀行・地方銀行などか

らなり、京都銀行を含む地方銀行は現在、全国に 64 行あります。

Ⅱ．京都銀行の沿革

これまでの京都銀行の歩みをふりかえりますと、その歴史は特異であるといえるでしょう。

先ほどもお話ししましたように、昭和 16 年 10 月 4 つの銀行が合併し、福知山に丹和銀行として誕生したのが京都銀行のはじまりです。ここが当行の特異なところです。多くの地方銀行は国立銀行（ナンバー銀行）の後継で、県庁所在地で生まれ育っています。当行は地方都市で生まれたというユニークさがあります。加えていうならば、京都市内に支店さえない零細銀行でした。

戦後復興期の日本経済のなかで、中小企業の多い京都は経済変動により大きな影響を受けました。京都市内は都市銀行に席巻されていました。傾斜生産方式のもと基幹産業が重視され、京浜・阪神地区に資源の集中投下が行われましたが、京都の伝統産業は対象外でした。京都市内には、三和・三菱・帝国（三井）が圧倒的支店網を持ち、これらの支店で資金を吸収して他地区へ配分していました。

「京都」における預貸率は、他地域より 20%も下回り、中小企業の資金難は明らかでした。当時の一萬田尚登（いちまだひさと）日銀総裁は、京都に地元金融機関を整備・育成する必要があると考えていました。そのようななか、京都府の蜷川虎三知事の下、京都の行政・産業界からの働きかけを受けて、当行（当時：丹和銀行）は福知山から京都への本店移転の方針を決定しました。当時の京都市民には、丹和銀行は全く知られておりませんでした。昭和 26 年に名称を京都銀行に変更、昭和 28 年に本店を京都に移転し、高島屋烏丸店の跡地を譲り受けた場所（烏丸松原）に、本店を設けました。当時、預金量の銀行順位は全国 56 行のなかで 44 位でした。

当時、京都市内は都市銀行の牙城だったため、京都の老舗企業には相手にしてもらえませんでした。そうしたなかで、当時の頭取が我々の進むべき道として、当時はまだベンチャー企業であった京セラ・村田製作所・オムロンなどに融資をし、成長のお手伝いをはじめ、今日に至ります。これらの企業は世界的企業にまで発展され、今でも親しいお付き合いをさせていただいている次第です。この 3 月には預金量は地銀 64 行中 8 位に位置しており、やっと一人前の地方銀行になりつつあると思っています。

Ⅲ．京都産業の歴史と特徴

京都の復興

明治初期の京都は厳しい時代でした。首都が東京へ移ると同時に産業の中心地も東京へ移り、京都は衰退しはじめました。人口は明治維新前の 35 万人から 23 万人へ減少、京都の人たちは危機感から、殖産興業を一つの柱にしました。近代産業の育成です。その原動力となったのが、水力発電所建設です。疎水を完成させ、明治 24 年には営業用としては我が国初の水力発電所が蹴上に建設されました。その電力を利用して、工場に電気が送られ、市街には路面電車が走りました。これが京都の近代化に大いに役立ちました。さらに、電気はタバコ製造工場にも活用されました。また、疎水は物資･旅客輸送にも大きく貢献しました。

京都復興策として、明治 28 年には内国勧業博覧会が岡崎で開かれ、京都駅から会場への足として路面電車が活躍しました。また、時代祭の前身でもある時代行列が行われ、都をどり・鴨川をどりも始まりました。

京都を支えた「水の文化」

京都盆地は地下水が豊富で、水量は琵琶湖に匹敵するといわれています。錦市場なども水が豊富であるために栄えました。魚屋・生麩や豆腐づくりなどに井戸･地下水が活用され、自然の冷蔵庫にもなりました。

地下水は、京料理・精進料理や懐石料理にも利用されています。酸が少なくなめらかな水質が京都の地下水の特徴で、口あたりの柔らかい酒が作られています。「灘の男酒」、「伏見の女酒」などといわれているのは、そのためです。京友禅の染めにも豊かな水が使用されていました。

京都の産業と企業の発展

京都は、明治維新後約 30 年で復活を果たしました。電気による産業振興はいうまでもありません。電気はモーターを動かし動力となります。それを基盤にして、老舗から技術を継承し、ベンチャー企業の飛躍にもつながりました。

明治の産業近代化のために設置された舎密局という土壌から島津製作所が生まれました。島津源蔵（初代）は島津製作所をつくり、源蔵（二代目）は蓄電池を作製しました。これは今日、GS ユアサとして花開いています。島津製作所は分社化を進め、日本輸送機など様々な企業も生み出しました。

村田製作所は、特殊窯業製品から出発しています。これは陶磁器（焼成技術）をベースにセラミックコンデンサにつなげたものです。今では、村田製作所はアップル社に部品を供給、村田製作所の製造が滞るとアップル社製品の製造遅延につながるほどの存在感を持つに至っています。さらには、京セラも伝統産業の技術を基盤にして今日があります。このように、京都は伝統産業で培われた技術を基盤にして、ハイテク産業・ベンチャーを生み出してきました。

ベンチャー企業と京都産業の未来

京都には数々の有名企業が誕生しました。内陸に立地し、軽薄短小産業に適していたためです。京都企業の利益率はきわめて高く、キーワードは「高付加価値」「オンリーワン」です。

京都の未来は明るいと思っています。半導体は今後も重要ですが、次世代高速通信への移行のなかでは、センサー・電子部品･モーターが鍵になります。それらはすべて京都の企業が得意とする分野です。今後も京都の企業には期待が持てます。

“京都維新”ともいうべき、京都近代化の施策・京都復興へかける思い、それが京都の今日を生み出しました。逆境に打ち勝って、今日があります。京都は観光や大学だけではありません。もう一つの顔、“ものづくり”があります。現代における“京都維新”を期待しています。

Ⅳ．経営理念の実現に向けて

人は行動をする時、どうしてもぶれがちになるものです。そのため、大事にしていきたいと常に考えている言葉があります。

「一燈を提げて暗夜を行く」（佐藤一斎「言志四録」）これは自ら信じる「志」が大事であるということです。ことあるごとにこれをかみしめています。

また、愛読書は「青春とは」（サムエル・ウルマン）です。彼が 78 歳の時に書いた詩ですが、気持ちを前向きにしてくれます。これを心に刻んで仕事に取り組んでいます。すなわち、

「青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた想像力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に精神はしぼむ。」

これらを心の拠り所にして、自分に与えられた道､バンカーの道を信じて全うして行きたいと思っています。

【立命館大学経営学部校友会】
〒567-8570　大阪府茨木市岩倉町 2-150
TEL:072-665-2090　FAX:072-665-2099
E-mail: info@ritsba-kouyukai.jp